

今まで4回にわたって連載してきた「清水真砂子さんと読むゲド戦記」は今回で最終回です。館内で行っている読書会では、これまでも「ゲド戦記」を課題図書としたことがありますが、この連載を導き手に改めて読み直したいと思いました。以前より、もう少し注意深く読み、読み飛ばしてしまったもの、気づけなかったこと、新たに気づいたことなど、読書会の中で話せたらと思っています。

また、美術館では新しい企画展示「アーヤと魔女展」がはじまりました。スタジオジブリの最新作、そして初のフル3DCGの長編アニメーションである「アーヤと魔女」の制作工程を宮崎吾朗監督自ら説明する展示です。2Dアニメーションと3DCGアニメーションとの制作上の違いや、この2つの融合によって生み出された映像表現など、スタジオジブリならではの3DCGアニメーションの作り方をご覧いただけます。映画とともに、お楽しみいただけたら嬉しく思います。



季刊トライホークス 2021年 | 63号
発行日……2021年6月2日 | 発行人……中島清文
発行所……徳間記念アニメーション文化財団
東京都三鷹市下連雀1-1-83 三鷹の森ジブリ美術館
編集……石光紀子 机ちひろ | デザイン……川島弘世
印刷……図書印刷株式会社 | 非売品

本棚より

トライホークスに置かれているおすすめの本を紹介していきます。
トライホークスの本棚の中の一冊から、みなさんの本棚の一冊にいただけたら嬉しいです。

ぼくは昆虫カメラマン

『むしかお』（ポプラ社）、『びっくり!? 昆虫館』（岩崎書店）など、図書室には昆虫カメラマン新開孝さんの写真絵本を置いています。新開さんは、愛媛大学農学部で昆虫学を専攻し、卒業後は東京に出て教育映画を作る仕事を経て、昆虫カメラマンとして独立しました。

この本に書かれているのは、昆虫との出会いや写真を撮るきっかけともなった本との出会い、東京での26年間とその後宮崎県に移り住むまでの体験談と昆虫の観察記です。

ヘルマン・ヘッセの「少年の日の思い出」では蝶に魅せられ、植物図鑑で植物の名前を調べるうちに、ただの雑草にしか見えなかった風景が豊かな自然へと変わっていったこと。そして、大学生のときに手に取った写真文集『安曇野』（田淵行男、朝日新聞社）は、写真のすばらしさ、自然観察のするどさに感銘を受け、将来への道しるべともなった本でした。新開さんは、本と出会いながら、昆虫カメラマンこそが自分のやりたい職業だと考え、写真とともに、昆虫の暮らしや素顔がどれほど魅力的か伝えることを目指したそうです。

アカスジキンカメムシ、アリスアブ、カマキリモドキ……、モノクロの写真には、不思議な虫の姿や生活の様子が記録され、この美しい、小さな生き物を誰かに見せたい、届けたい、という新開さんの思いが伝わってきます。この本は身近にある小さな生き物の世界を見せてくれるだけでなく、新開さんが読んできた本を手にとってみたいと思う、新たな本へとつながる1冊でもありました。



ぼくは
昆虫カメラマン
写真・文……新開 孝
岩崎書店 1,430円

ましま せつこ

Setsuko Mashima

夢中になって読んだ本

ましまさんの絵本『あんたがたどこさ』は、タイトルの「あんたがたどこさ」や「おてらのおしょうさん」など、日本に伝わる15のわらべうたや手遊びを紹介しています。図書室で行っていたお話の会でも、手遊びを取り入れたくて何度も読みました。遊び方も楽譜もついている本なので、子どもたちと一緒に楽しんでもらいたい本です。



* * * * *

私と絵本との出会いは「キンダーブック」からだった。リアルでかわいい子どもや、花に囲まれたお姫さまの絵を見たり、夢の世界を楽しんでいた。戦時中でなかなか手に入らないようになると、母は書店に、子どもの本の取り置きを頼んでくれた。ある日、ハードカバーの『はなのすきなうし』という本が届いた。赤地に白抜きの花に囲まれた子牛の表紙がきれいで、とてもうれしかった。子牛の名前は、フェルジナンド。牧場の木の下で、花の香りを嗅ぐのがすきだった。ある日、草の中にいた、くまん蜂に刺され、すごい勢いで飛び上がったところを、強い牛を探していた闘牛士たちの目に止まり、闘牛場に連れて行かれた。いよいよ闘牛開催の日、なんと、フェルジナンドは、会場に入場するなり座り込んでしまった。強い牛の戦いを見るのを楽しみに、花で着飾った大勢の見物人の花の香りに、うっとりしてしまったのだ。結局、フェルジナンドは、元の牧場に戻り平穏に過ごしたのだった。私はこのスペインが舞台の絵本でいろいろな外国があることを知った。兄弟5人で大切に読んだ絵本だった。

私は高校まで、山形県鶴岡市で過ごし、その後、

美大を卒業して、デパートで、ファッション等の広告デザインをすることになった。そんな時、通勤途中にある書店で、長新太の絵の『がんばれさるのさらんくん』を見つけた。その時、私もこんな楽しい絵本を作りたいと思った。そして、久しぶりに実家に帰った時、蔵の中で、江戸時代の子どもの着物をたくさん見つけた。鮮やかな色と大胆な模様に驚き、見ていた時、ラジオから“わらべうた”が聴こえてきた。昔の子どもたちは、こんな着物を着て歌いながら遊んでいたのかなと想像した。うたい継がれてきた“わらべうた”は、子どもにしか出来ない発想や、独特な言葉、旋律がおもしろい。今の子どもたちにも伝えたいと思った。それから、デザイン展（日宣美展）に“わらべうた”のレコードジャケットとして作品を出品した。その絵を、石井桃子さんに見ていただく機会があって、思いがけず、絵本として『わらべうた』（福音館）ができた。それからしばらく後、遊ぶ“わらべうた”の絵本（こぐま社）もできた。デザインの仕事の関係で、海外のデザイナーの本、“ディック・ブルーナ”や“レオ・レオーニ”や“ブルーノ・ムナーリ”などの絵本を見ることができた。

それから、私は結婚して2人の男の子の親になり、今度は毎日、寝る前に絵本を読んでやることになった。5才位までだったが、子どもが選んできた一番人気の本が、センダックの『かいじゅうたちのいるところ』だった。その絵本は私がアメリカで見つけた本で、突拍子もなく、ゆかいで、ど迫力のあるかいじゅうが気になって買ったものだった。英語なので、絵を見ながら適当に訳すしかなかったが、その時の息子たちの反応がおもしろかった。主人公のマックスは、いたずらをして、ごはん抜きで寝室に入れられた。すると、部屋の中に木が生えはじめ、ジャングルになり、やがて、大波がボートを運んで来る。マックスは、それに乗って航海すること1年あまり、かいじゅうの島に着く。上陸すると、恐ろしいかいじゅうがぞろぞろ襲って来る。マックスは、かいじゅうに魔法をかけ、王様になる。それから仲よく踊ったりして遊ぶ。でも、しばらくするとお腹もすいて家に帰りたくなった。かいじゅうたちは“行かないで、食べたい程好きなんだ”と追いかけて来たが、マックスは“いやだ”と言って、またボートに乗って逃げ、ようやく部屋に戻ると、テーブルの上に、まだ温かいスープがあった、というお話。

息子たちは、かいじゅうが現れる場面が近づくと身を固くし、突然海から鼻息荒くかいじゅうが出て来ると、いきなり私にしがみつくのだった。

息子たちは、この本が本当は怖かったのかもしれないと後から思ったが……。この超現実ばなれの世界に感情移入して終わると、いつも“あーおもしろかった”というのだった。この絵本はどれだけくり返し読ませられたことか。——また長男6才位の頃、“ぜーんぶ読んだ”と本を小脇に抱えてやって来た。『あおい目のこねこ』だった。字を覚えてばかり。ひとりで厚い本を読みきった満足感でいっぱい顔だった。次男はパートンの『ちいさいおうち』、『せいめいのれきし』が好きだった。2人とも楽しかった本は忘れられないらしく大人になった今も時々話題にする。私も後から思うと楽しい時間だったと思う。

ましませつこ

1937年、山形県鶴岡市に生まれる。女子美術大学図案科卒業。広告デザインの仕事にたずさわった後、子どもの本の世界に入る。和紙の型染や切り絵の手法で描いたわらべうたの絵本で、子どもたちに日本らしい美しさを手渡している。主な作品に、『わらべうた』『うめぼしさんのうた』(福音館書店)、『あがりめさがりめ』(こぐま社)等がある。

トライ
ホークス
の本
おかあさんと子どもの
あそびうた
あんたがた どこさ
作…ましませつこ
こぐま社 1,320円



[…………… 夢中になって読んだ本 ……………]



はなのすきなうし
文…マンロー・リーフ
絵…ロバート・ローソン
訳…光吉夏弥
岩波書店 880円



がんばんれ
さるのさらんくん
作…中川正文
画…長 新太
福音館書店
品切れ・重版未定



かいじゅうたちの
いるところ
作…モーリス・センダック
訳…神宮輝夫
富山房 1,650円



あおい目の
こねこ
作…
エゴン・マーチーセン
訳…瀬田貞二
福音館書店
1,320円



ちいさいおうち
文・絵…
バージニア・リー・パートン
訳…石井桃子
岩波書店 1,870円



せいめいのれきし
改訂版
文・絵…
バージニア・リー・パートン
訳…石井桃子
監修…真鍋 真
岩波書店 1,870円

【連載……第4回】清水真砂子さんと読む『ゲド戦記』
希望は名なき人々の中にこそ

物語は結末へと向かい、この連載も最終回を迎えた。1976年の「ゲド戦記」（シリーズ名原題はEarthsea Books）第1巻『影との戦い』の出版から2004年の『ゲド戦記外伝』（のちに『ドラゴンフライ』と改題）の出版まで、翻訳の仕事は足掛け28年にわたった。ただし、その間には第3巻の出版から第4巻『帰還』出版までの18年に及び私自身を含む読者にとっては長い待ちの時間があった。この時は誰もが3巻で終わりかと思ったものだ。けれど、作者にとってそれは、真に生きるに必要な人間観、世界観をたぐりよせ、形にしていこうための苦難と喜びの日々だったに違いない。そして、そう。ようやく第5巻としてしっかりと日本でも落ち着いてきた『ドラゴンフライ』は、作者自身が一度自身の創造した世界を、そこに暮らす人々を、その空気を確かめようとした1冊だったかもしれないと、今にして思われてくる。そうそう、この巻で読者は「真に偉大なる人々は皆無名のままに世を去っていく」と言ったインドの思想家ヴィヴェカナンダを思い出させる言葉にでくわすだろう。

さて、今では「ゲド戦記6」として最終巻にすわる『アースシーの風』もまた、最後の大団円を期待した多くの読者を驚かせもすれば、がっかりもさせたらしい。

「あれだけの人生を歩んできた男と女の晩年がこれかよ。こんな夫婦だったらどこにだっていないじゃないか。」私はそんな声をあちこちで耳にしてきた。そう、そのとおりだ。確かにこんな夫婦はどこにだっていない。あんな言葉のやりとりもまた、日々私達のくらしのなかに。

が、そのどこにでもいる人々をこそ文学は扱ってきたのではなからうか。ゲドは私の中にもいれば、あなたの中にもいる。テナーだってそう。子育てだって、血の繋がりがだけが親子の関係を作ってきたわけではなかった。無傷な、五体満足な子どもだけが周囲の人の愛を受けてきたわけではなかった。時空を超えて少しだけ目をこらし、耳を澄ませば、私たちは世界のあちこちで「テルー」を引き取って、育て、空にはばたかせた「テナー」たちに会うことができる。「ゲド」だってそう。既存の権威と権力を自ら投げ捨て、ただの人となっていて、日々を生きている「ゲド」は、少しだけ目をこらせば、私たちの周

りにも、ちゃんといてくれる。

そして、セセラクは? 「セセラクって?」そんな声も聞こえてきそうだけれど、神奈川県のある高校に招かれて、「ゲド戦記」の話をし、続く生徒たちとの座談会もおえて部屋を出ようとした私に、「わたし、セセラクがいちばん好き。」とそっと声をかけてきてくれたのは、それまで一言も発しなかった女生徒だった。彼女はセセラクを描写する作者の、他とは違うペン使いに気づいていたにちがいない。

それにしても、最終巻最後の場面をあの夫婦の会話で閉めたことに、私はあらためて感嘆する。読むたびにうれしくなって、拍手を贈りたくなる。そして、思うのだ。これはひょっとすると、トルストイの『アンナ・カレーニナ』のあの冒頭の有名な言葉への問いかけでもあれば、異議申し立てでもあったかもしれない。

私は40代に入るあたりから、『アンナ・カレーニナ』のあの冒頭の言葉に首を傾げるようになった。幸福のありようは無数あるはずなのに、なぜ? と思い始めたのである。ついに私は1989年夏、公の場で初めてこの疑問を口にした。（この折の講演録はJICC刊拙著『幸福の書き方』所収）そして、ル＝グウィンもまた同じ疑問を1997年『ミシガン季刊書評』冬号に記したのだった。（岩波書店刊『ファンタジーと言葉』所収）

もうひとつ。これは読者のみなさんにおたずねしたい。「ゲド戦記」全6巻で、作者は次の時代を担う若者の誰に最も期待を寄せているか。私がおすおすと、この人では? と、その名を冠した小さな奨学金を勤務先の短大の学生達に贈ったことを電話で報告すると、「そのとおり!」とル＝グウィンのはずんだ声が返ってきた。ただ受け取った学生達にこちらの思いが伝わっていたかどうか。それは10年をすぎた今も、わからないままである。



アースシーの風 ゲド戦記6
 著者…アーシュラ・K.ル＝グウィン
 訳者…清水真砂子
 岩波少年文庫 836頁

(児童文学者・翻訳家
 清水真砂子)